

見田宗介名言集

「市民社会の存立の原理としての利害の普遍的相剋性は、欲求の禁圧と制約によってではなく、欲求の解放と豊富化によってはじめて原理的にのりこえられうる。富や権力や栄光といったものへの執着を欲求の肥大化としてではなく、欲求のまずしきとしてとらえること。解放されたゆたかな欲求を、これらの人びとの目にさえ魅惑的なものとして具体的に提示すること。生き方の魅力性によって敵対者たちを解放し、エゴイズムの体系としての市民社会の自明の前提をつぎつぎとつきくずすこと」(真木悠介『気流の鳴る音——交響するコミュニケーション』ちくま文庫、原著 1977 年、31 頁)。

「現象学的な判断停止、人類学的な判断停止、経済学的な判断停止に共通する構造として、〈世界を止める〉、すなわち自己の生きる世界の自明性を解体するという作用がある。このことによって、Ⅰ異世界を理解すること、Ⅱ自世界自体の存立を理解すること、Ⅲ実践的に自己の「世界」を解放し豊饒化することが可能となる。「世界」のあり方は「生」のあり方の対象的な対応に他ならないから、このⅢはいいかえれば、自己自身の生を根柢から解放し豊饒化することに他ならない」(真木悠介『気流の鳴る音——交響するコミュニケーション』ちくま文庫、原著 1977 年、86 頁)。

「芭蕉は松島をめざして旅立つ。「奥の細道」の数々の名句をのこした四十日余の旅ののち松島に着く。しかし松島では一句をも残していない。「窓をひらき二階をつくりて、風雲の中に旅寐する」一夜を明かすのみで、翌日はもう石巻に発っている。松島はただ芭蕉の旅に方向を与えただけだ。芭蕉の旅の意味は「目的地」に外在するのではなく、奥の細道そのものに内在していた。松島がもしうつくしくなかったとしても、あるいは松島にたどりつくまえに病にたおれたとしても、芭蕉は残念に思うだろうが、それまでの旅を空虚だったとは思わないだろう。旅はそれ自体として充実していたからだ」(真木悠介『気流の鳴る音——交響するコミュニケーション』ちくま文庫、原著 1977 年、133 頁)。

「人類の歴史はたとえみじかいはいえ、一億や二億の年月はおそらく生きつづけるであろうし、その最初の百分の一ほどの歴史のなかに解答を見出せなかったからといって、われわれの想像力をその貧寒なカタログのうちにとじこめてしまっはならないだろう。われわれとしてはただ綽々と、過程のいっさいの苦悩を豊饒に享受しながら、つかのまの陽光のようにきらめくわれわれの「時」を生きつくすのみである」(真木悠介『気流の鳴る音——交響するコミュニケーション』ちくま文庫、原著 1977 年、209 頁)。

「現代社会をひとつの凝固した物象としてみるのではなく、その存立の構造においてみるかぎり、巨視的な世界の構造においても、微視的な自我の構造においても、これら〈異世界〉への抑圧のうえにはじめて、われわれの合理化された日常性がなりたっていることがわかる。そうであればこそ、それらはけっしてわれわれの生きる世界の外なるユートピアではなく、われわれ自身の世界の内部、自我の内部に呼応する解放の拠点となるのだ。われわれの自我の深部の異世界を解き放つこと」(真木悠介『気流の鳴る音——交響するコミュニケーション』ちくま文庫、原著 1977 年、212 頁)。

「この仕事の中で問おうとしたことは、とても単純なことである。ぼくたちの「自分」とは何か。人間というかたちをとって生きている年月の間、どのように生きたらほんとうに歓びに充ちた現在を生きることができるか。他者やあらゆるものたちと歓びを共振して生きることができるか。そういう単純な直接的な問いだけにこの仕事は照準している。…アクチュアルなもの、リアルなもの、実質的なものがまっすぐに語り交わされる時代を準備する世代たちの内に、青青とした思考の芽を点火することだけを願って、わたしは分類の

仕様のない書物を世界の内に放ちたい」(真木悠介『自我の起源——愛とエゴイズムの動物社会学』岩波書店、1993年、197頁)。

「インドには古代バラモンの奥義書以来、エソテリカ(秘密の教え)という伝統がある。そのエソテリカの内の一つに、〈初めの炎を保ちなさい〉という項目がある。直接には愛についての教えだけでも、インドの思想では万象の存在それ自体への愛こそが究極のものであり、知への愛である学問についてもそれはいえる。人が学問に志す、その志の〈初めの炎〉を保つこと、自分にとって、時代にとって、人間にとって、あるいは人間を含む一切の存在にとって、本質的な問題を問いつづけるために、そしてこの問題を問いつづけるということのためにだけ、あらゆる個別の学問の領域を仕切る国境を越えつづけること、この越境する鮮烈な問題意識の内にだけ、社会学という〈遊牧する学問〉のアイデンティティは存在している」(見田宗介『社会学入門——人間と社会の未来』岩波新書、2006年、15頁)。

「ぼくたちは今「前近代」に戻るのではなく、「近代」にとどまるのではなく、近代の後の、新しい社会の形を構想し、実現してゆくほかはないところに立っている。積極的な言い方をすれば、人間がこれまでに形成してきたさまざまな社会の形、「生き方」の形を自在に見はるかしながら、ほんとうによい社会の形、「生き方」の形というものを構想し、実現することのできるところに立っている。この時に大切なことは、異世界を理想化することではなく、〈両方を見る〉ということ、方法としての異世界を知ることによって、現代社会の〈自明性の檻〉の外部に出てみるということです。さまざまな社会を知る、ということは、さまざまな生き方を知ることであり、「自分にできることはこれだけ」と決めてしまう前に、人間の可能性を知る、ということ、人間の作る社会の可能性について、想像力の翼を獲得する、ということです。…このような社会学の方法としての「比較」は、〈他者を知ること〉、このことを通しての〈自明性の罅〉からの解放、想像力の翼の獲得という、ぼくたちの生き方の方法論と一つのものであり、これをどこまでも大胆にそして明晰に、展開していくものです」(見田宗介『社会学入門——人間と社会の未来』岩波新書、2006年、39頁)。

「社会学の創始者であるコントが求めたのは、〈予見するために見る〉ということであった。つまり未来を知るために現在を知る、ということであった。政治大革命を了えたフランス産業革命の時代、これから成熟してゆくはずの近代世界の総体を見はるかすための、総合知の結集という荒削りの情熱として、社会学は生まれた」(見田宗介「高原の見晴らしを切開くこと——未来の社会学への助走」『現代思想』2014年12月号、28頁)。

「未来の社会学の課題は二つある。未来を予見することと、未来を構想することである。コントの時代は、進歩という直線コースを走ればよいという区間だったから、未来を予見することが、そのままよりよい世界を知ることと重なっていた。時代の大きい転回点としての現代では、未来を予見することは、未来を選択し、未来を構想することの、前提である。危険社会の地雷原に踏みこむよりも手前のところで、「成長」の自己目的化という狂気の基準に依存するシステムを転回すること。人間の幸福という原的な基準＝正気の基準に立ち帰ってシステムを構築すること。健康と愛と自然の中で「ただ生きること」の単純な至福を感受する力を基底に、「近代」の輝かしい達成を持続して享受することのできる安定平衡の高原の見晴らしを切開くための、経済と政治と文化のシステムを統合して構築すること、このような転回と構築のための、専門を越え、国境を越え、世代を越えて永続する共同の探究の集団として、「場所」としての社会学を構想することができる」(見田宗介「高原の見晴らしを切開くこと——未来の社会学への助走」『現代思想』2014年12月号、33頁)。